

問わず語りの 人間力原論

高見大介



麦ごとが如く

先日、たまたま目にした麦畑は黄金色に染まっていた。麦の実が熟すこの時期を麦秋というらしい。あれ、今は秋なのか？とも思ったが、秋という言葉には「穀物が成熟する時期」という意味もあるようだ。味わい深いではないか。

しかしこの美しさは、僕には筆舌に尽くし難い。その風景に見とれながら、アレやコレやと考えた。麦が黄金に輝くこの季節において、われわれ人間はどうだろうか。連休の疲れを引きずっているのか、日中の寒暖の差に対応できていないのか、なかなかやる気が出ない。そう、五月病の時期である。「麦はあんなに輝いているのに人間は」などと考えていると、昔聞いたある学者の話思い出した。

母親が病気で先立ち、1人暮らしになった父親を在宅で介護することになったその学者は、父親のために慣れぬ料理を作り

続けた。すると父親は「うまい」といって食べてくれる。うれしくなると料理教室にも通い始め、デザートまで作るようになった。しかし、そんな日は長く続かず父親も亡くなってしまった。その後どうなったのかというと、もともとの生活のように、その学者は食事を外で簡単に済ませるようになったという話だ。

この話を聞いた時に僕はこう思った。人は自分がうまい物を食べるためには、やる気をあまり発揮しない。むしろ他者がおいしいと言ってくれる物のためにこそ、そのやる気を発揮する

ことの方が多いのだと。そう考えると、人のやる気は自分と他者との間で生まれてくることが多いのかもしれない。

やる気が出ないこの時期に、やる気を取り戻す一つの方法として、必要とし必要とされるような人との交流を意識してみよう。多少うまくいかなくてもいい。黄金に輝く麦は何度も踏まれて寒い冬を耐え、今そこに爛然と輝いている。この試み、皆さんも試してみませんか。

たかみ・だいすけ 日本文理大 人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。41歳。